

木更津工業高等専門学校

正員

黒川章二

同上

正員

石垣慶次

計測リサーチコンサルタント

正員

加登文士

### 1 まえがき

アンボンドPC工法は、施工性に優れ、用途の多様性に富み、近年かなり普及してきたが、緊張材の総力を定着端で負担するために、定着端における緊張材の破断が問題視されている。著者らが、入念に製作したPC鋼棒使用のアンボンドPC桁について行なった疲労試験においても、緊張材疲労破壊の場合に定着端での破断が多く生じた<sup>1)</sup>。原因として定着端における緊張材の曲げが考えられるので、その対策として実用的な緊張材破断防止具を試作した。それを用いたアンボンドPC桁について疲労試験を実施したところ、きわめて高サイクルまでの疲労寿命の範囲において好結果が得られたので報告する。

### 2 緊張材定着端破断防止具

これは上底と下底が平行な円柱を斜めに切断して中心を穿孔した2枚のクサビ状穴あき円板より成る座金である。2枚の円板の回転により任意方向の任意な角度を調整することができる。それを自在座金と呼ぶ。図1に示すように定着端のコンクリート面に不整角θがある場合に、自在座金を用いない従来の定着方法では曲げにより緊張材に折れが生じるが、θより大きい調整角能力θ<sub>max</sub>を有する自在座金を用いることにより、図示のように緊張材に曲げ拘束を与えることなく定着することができる。θ<sub>max</sub>は定着部を構成する材料の摩擦係数から決められる。図2に示すように、緊張材の引張力P<sub>t</sub>の作用により、自在座金とアンカーブレートとの境界面においてすべり力Wが生じる。座金がすべると、緊張材にせん断力が作用して危険な状態になるので、静止状態を保持しなければならない。図2が静止を保つ限界の状態を表わすものとすれば、静止摩擦力Fが作用する。いま、摩擦係数をμとすれば、 $F = \mu P_t \cos \theta_{max}$ 、また、 $W = P_t \sin \theta_{max}$ 、したがって、すべりが生じる限

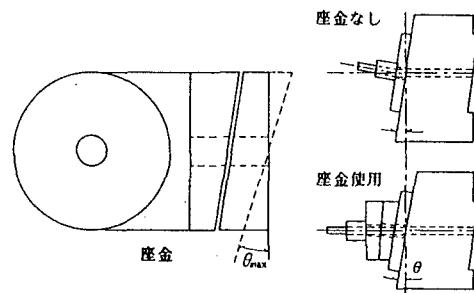


図1 自在座金

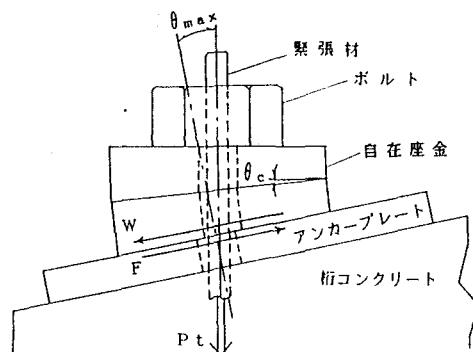


図2 限界傾斜面における定着状況

表1 コンクリートの示方配合

スランプ cm	粗骨 材の 最大 寸法 mm	水セ メント 比 %	細骨 材率 %	単位量 (kg/m <sup>3</sup> )				
				水	セメント	細骨 材	粗骨 材	ボソリ スNo5L
4±1	20	40	41	143	358	735	1096	0.895

表2 PC鋼棒の性質

規格	直径 mm	降伏強さ kgf/mm <sup>2</sup>	引張強さ kgf/mm <sup>2</sup>	伸び %	弾性係数 kgf/mm <sup>2</sup>
SBPR95/110	14.9	125.5	134.2	12.0	21000

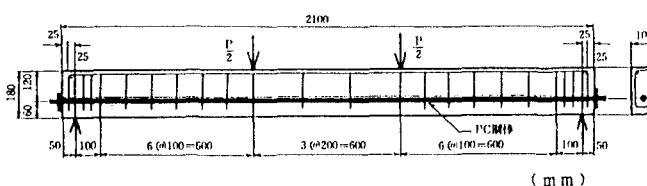


図3 供試体および載荷方法

界の状態において、 $W = F$  の条件から、 $\theta_{max} = \tan^{-1} \mu$ 、となる。みがきはだの鉄の場合に  $\mu = 0.20 \sim 0.35$  であり<sup>2)</sup>、 $\mu = 0.20$  を用いて算定すると、 $\theta_{max} = 11.3$  度が得られる。サンドブラストがけの場合には  $\mu = 0.40$  を採用すれば<sup>2)</sup>、 $\theta_{max} = 21.8$  度と算定され、かなり大きい角度を調整することができる。

### 3 疲労試験

表 1 に示す示方配合のコンクリートと表 2 に示す PC 鋼棒を使用して、自在座金をセットしたアンボンド PC 枠と通常のポストテンション方式のボンド PC 枠を供試体として、静的載荷試験および疲労試験を行なった。供試体および載荷方法を図 3 に示す。疲労試験は、下限荷重比を 0.20 に固定し、上限荷重比を実験因子とした。実験結果の概要を表 3 に示した。極限強さの平均値は、アンボンド PC 枠で 5.34tf、ボンド PC 枠で 5.96tf であり、その比は 89.6% である。いずれの種類の PC 枠においても、上限荷重比が大きい場合にコンクリートの曲げ圧縮破壊、それが小さくなると緊張材の破断が生じた。アンボンド PC 枠の場合、定着端における緊張材の疲労破壊が全然起らず、UF7 は上限荷重比 0.779 で 3962.98 万回の荷重履歴により中央部で緊張材が破断した。図 4 は上限荷重比と疲労寿命との関係を示す。荷重比が小さくなると、同一荷重比に対する疲労寿命は、アンボンド PC 枠の方が多くなる。図中の直線の回帰式と極限強さの平均値を用いると、ボンド PC 枠に対して、アンボンド PC 枠の疲労強度は、200 万回で 92.2%、1000 万回で 94.3% と、高サイクルになるにつれ、かなり接近する。図 5 は疲労寿命が 729.08 万回のボンド PC 枠の支点の内側 10cm における緊張材のひずみ振幅の変化である。40 万回程度の荷重履歴で緊張材の付着破壊が始めている。

### 4 まとめ

試作した定着端緊張材破断防止具が有効に機能し、アンボンド PC 枠の弱点と考えられている定着端緊張材破断を防止することができた。

### 5 参考文献

- 黒川章二：アンボンド PC はりの疲労に関する実験的研究、土木学会第36回年講概要集第5部、昭和56年10月
- 日本建築学会：高力ボルト接合設計施工指針（1972）

表 3 実験結果の概要

注) CM: コンクリートの曲げ圧縮破壊 TT: 緊張材の引張破壊

供試物の種類および記号	コンクリートの性質			有効フレーストレスカ数	試験別	静的試験結果			疲労試験結果			破壊形式
	圧縮強さ	引張強さ	弹性係数			ひびわれ荷重	極限荷重	下限荷重	上限荷重	荷重比	疲労寿命	
						tf	tf	tf	tf	x10°C		
	kgf/cm²											
アンボンド	US1	540	37.6	332000	14.12	静的	3.60	5.21				CM
アンボンド	UF1	"	"	"	14.03	疲労	3.60		1.04	4.30	0.825	927.71 CM
	UF2	"	"	"	13.97	"	3.60		1.04	4.43	0.850	7.91 CM
	UF3	"	"	"	13.85	"	3.60		1.04	4.56	0.875	0.32 CM
	US2	523	34.8	332000	13.97	静的	3.00	5.51				CM
	UF4	"	"	"	14.12	疲労	3.00		1.10	4.24	0.770	1000以上
	UF5	"	"	"	14.28	"	3.30		1.10	4.57	0.830	58.76 CM
	UF6	"	"	"	14.39	"	3.30		1.10	4.63	0.840	45.92 CM
	UF7	"	"	"	13.77	疲労	3.30		1.06	4.13	0.779	3962.98 TT
	UF8	"	"	"	13.87	"	3.30		1.06	4.40	0.830	2.43 CM
	UF9	"	"	"	13.75	"	3.30		1.06	4.26	0.804	18.68 CM
ボンド	BS1	493	33.7	339000	13.79	静的	3.60	5.80				CM
ボンド	BF1	"	"	"	13.97	疲労	3.30		1.16	4.64	0.800	28.12 CM
	BF2	"	"	"	13.79	"	3.60		1.16	4.35	0.750	1022.55 TT
	BF3	"	"	"	13.79	"	3.30		1.16	4.50	0.775	573.48 CM
	BS2	561	36.5	351000	14.85	静的	3.90	6.12				CM
	BF4	"	"	"	14.78	疲労	3.90		1.22	4.77	0.780	729.08 TT
	BF5	"	"	"	14.69	"	3.60		1.22	5.08	0.830	57.50 CM
	BF6	"	"	"	14.63	"	3.60		1.22	5.20	0.850	29.90 CM

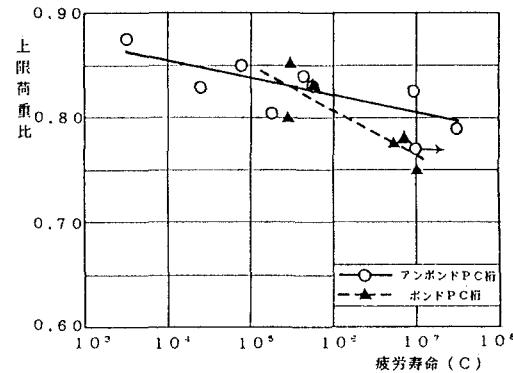


図 4 上限荷重比と疲労寿命との関係

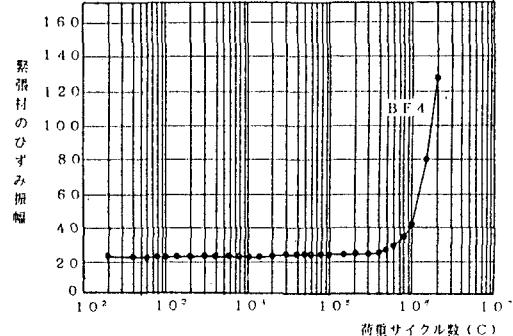


図 5 枠端部緊張材のひずみ振幅と荷重サイクル数との関係